

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成20年度病虫害発生予報第11号(3月)について

このことについて、病虫害発生予報第11号を発表したので送付します。

予報第11号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	-	並	並	やや多
	うどんこ病	-	やや少	並	並
	ハダニ類	-	やや多	やや多	並
	アザミウマ類	-	並	並	やや多
ナス	すすかび病	-	並	やや多	やや多
トマト	灰色かび病	-	やや多	やや多	やや多
	葉かび病	-	やや少	並	やや少
キュウリ	べと病	-	やや少	並	やや多
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ	-	並	やや多	並
	コナジラミ類	-	並	並	並
茶	カンザワハダニ	早	多	多	多

防除上特に注意すべき事項

- 1 微小害虫の防除の徹底
九州北部では3月以降の気温が平年より高いと予報されている。ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類等の害虫は、春先の気温上昇に伴い増殖が加速し被害が拡大する。したがって、密度の低いうちに防除を徹底する。
- 2 イチゴ親株の炭そ病防除の開始
イチゴの炭そ病防除は親株からの防除が重要である。育苗はできるだけ雨よけ施設内で行い、施設内は風通しをよくする。また、芯葉が動き出す3月から定期的に薬剤防除を実施する。

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴ灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病果率 0.1%（平年 0.1%、前年 0.0%）

発生ほ場率 30.4%（平年14.0%、前年 8.0%）

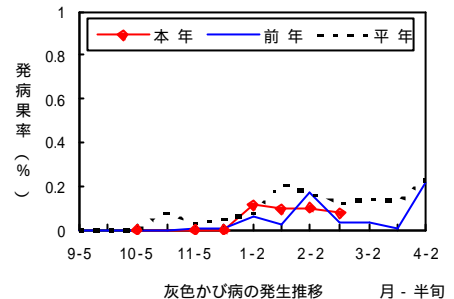
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 発病した果実は早めに除去し、薬剤防除を徹底する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をロテーション散布する。



2 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（ - ）。

発病株率 0.4%（平年 1.0%、前年 1.2%）

発生ほ場率 17.4%（平年15.5%、前年11.5%）

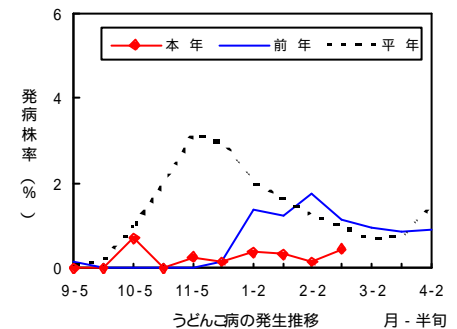
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 発生が多く認められる地域もあるので、今後の発生について注意する。

イ 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

ウ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。



3 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬の調査、発生量は平年よりやや多かった（ + ）。

寄生株率 13.9%（平年 8.3%、前年 9.4%）

発生ほ場率 69.6%（平年42.1%、前年46.2%）

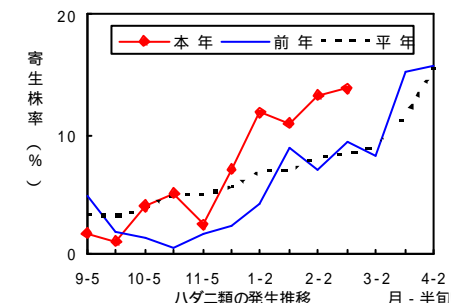
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 防除は摘葉後に行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

ウ カブリダニ類を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。



4 イチゴのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：前4か年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬の調査、発生量は前4か年並であった

(±)。

寄生株率 0.8%(前4か年平均0.6%、前年0.1%)

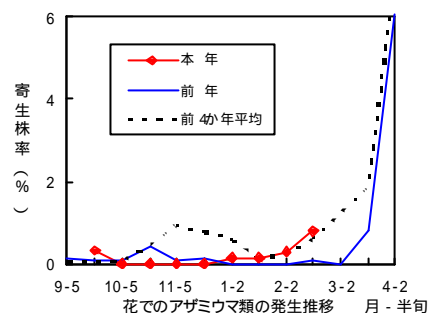
発生ほ場率 13.0%(前4か年平均8.1%、前年4.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 3月以降温度の上昇に伴い密度が急増するので、花をよく観察し、成虫が確認されたら直ちに薬剤防除を行う。

イ 天敵を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない薬剤を散布する。



5 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった

(±)。

発病葉率 18.7%(平年21.1%、前年23.6%)

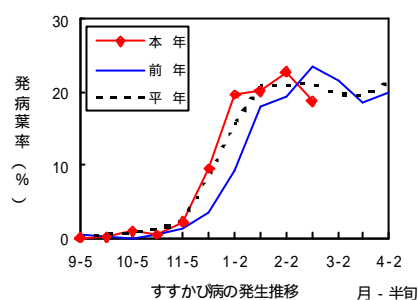
発生ほ場率 88.9%(平年90.7%、前年77.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 発病葉は早めに除去し、ほ場外に処分する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。



6 トマト灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

発病果率 0.4%(平年 0.2%、前年 0.1%)

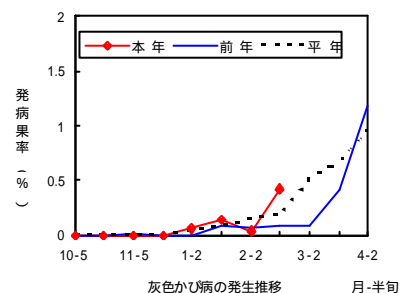
発生ほ場率 36.4%(平年 22.3%、前年25.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 発病した果実は早めに除去し、薬剤防除を徹底する。

イ 日最低気温が高いと暖房機が稼働しないこともあるので、送風をするなどして湿度の低下を図る。



7 トマトの葉かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病葉率 2.1% (平年 4.0%、前年 0.5%)

発生ほ場率 60.0% (平年 26.7%、前年 27.3%)

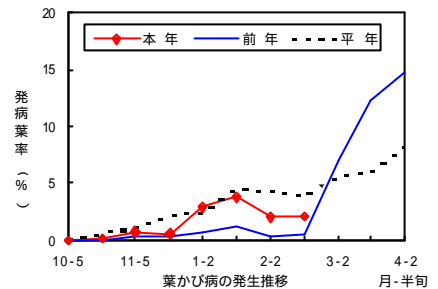
イ 向こう1か月の気象予報は、気温は、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。

ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。



8 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並よりやや少なかった(-)。

発病葉率 5.9% (平年 11.9%、前年 1.1%)

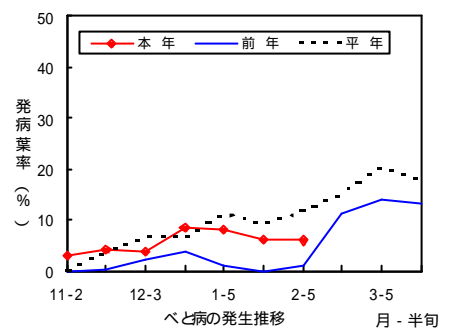
発生ほ場率 57.1% (平年 56.9%、前年 40.0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。



9 ミナミキイロアザミウマ (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 4.7% (平年 3.2%、前年 5.7%)

発生ほ場率 66.7% (平年 33.9%、前年 66.7%)

ナス被害果率 0% (平年 0.3%、前年 0.6%)

発生ほ場率 0% (平年 13.6%、前年 12.5%)

わかしり寄生葉率 1.3% (平年 2.4%、前年 3.4%)

発生ほ場率 28.6% (平年 26.7%、前年 60.0%)

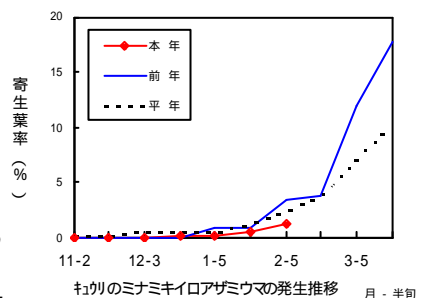
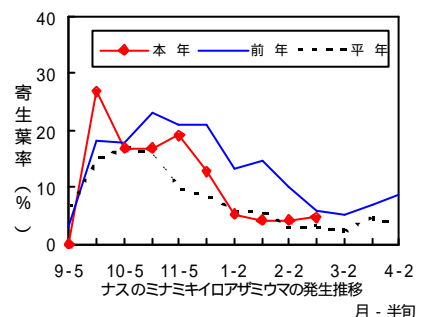
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスはアザミウマ類が低密度でも伝染し蔓延するので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないよう丁寧に散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。

ウ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の増殖源を絶つ。



エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

(ホームページアドレス <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>)

10 コナジラミ類(野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 9.8% (前4か年平均 4.5%、前年 7.2%)

発生ほ場率 66.7% (前4か年平均56.3%、前年55.6%)

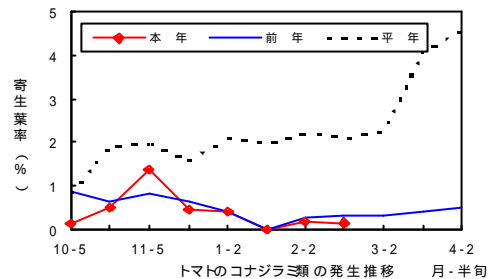
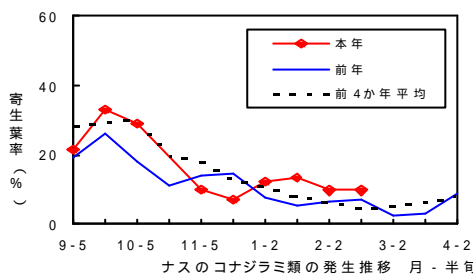
トマト寄生葉率 0.1% (平年 2.1%、前年 0.3%)

発生ほ場率 9.1% (平年29.7%、前年16.7%)

むらり寄生葉率 0% (前3か年平均 2.4%、前年 0.6%)

発生ほ場率 0% (前3か年平均35.8%、前年20.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は多いとされている(+)



(3) 防除上の注意

ア タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病(TYLCV)やキュウリ退緑黄化病(仮称)(CCYV)の媒介虫であるので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げるとともに、葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。

ウ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、本年度の薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ アブラムシ類	やや少	並	並	・天敵を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない薬剤を散布する。
ナス うどんこ病 灰色かび病	並 並	並 並	並 並	・発病葉や発病果実は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
キュウリ うどんこ病 灰色かび病	並 やや少	並 並	並 並	・薬剤は、葉の表裏に十分かかるように丁寧に散布する。 ・発病果実は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生時期：平年より早

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果、裾葉における発生量は平年より多かった(+)。

(裾葉)

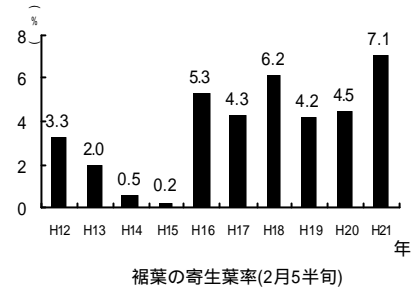
寄生葉率 7.1% (平年 3.4%、前年 4.5%)

50葉当たり寄生虫数 12.9頭 (平年 5.5頭、前年 7.3頭)

発生ほ場率 77.8% (平年 53.2%、前年 50.0%)

越冬後第1世代孵化幼虫の発生ほ場率 27.8% (平年 10.0%、前年 11.5%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高いと予想されており、今後発生量及び表層への移動が増加することが予想される(+)。



2月20日付けで注意報第6号を発表。

越冬成虫の産卵や幼虫の孵化が平年より早いので、春期の基本防除は孵化幼虫の発生初期をねらって、平坦地で3月1～5日頃、山間地で3月5～10日頃を目安に徹底する。

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性がもっとも大きい天候は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は多いでしょう。日照時間は平年並か少ないでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	20	70
降水量	20	30	50
日照時間	40	40	20

(福岡管区気象台 平成21年2月20日発表抜粋)

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるなど十分に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp